いの流水俳壇

松尾　満津於　選

「当季雑詠」

竹崎　光子

古本の処分ためらう文化の日

（評）新聞の「コラム」を別冊製本したものを読んだ。日本語は複雑で微妙で難解であるという、「親になる」と「親となる」という言葉の違いを書いている、子を産めば「親になる」のは犬猫の動物でも出来るが「親となる」のは難しい「に」と「と」で意味ががらりと違ってくる。文意を正確に読むことも難しいが、文学を味わうこともまた難しいと書いてある。俳句の世界ではそれが十七文字の文学であるだけに尚更考えさせられる事である。この「コラム」を読んで既に二十年余が経過している。古本の選別はむつかしい、今日は「文化の日」古本といえども一冊一冊にその時の記憶がよみがえる、だから、ためらうのである。

岡本　とも子

一湾の海光まとひ石蕗の花

（評）石蕗は日短になる季節に黄金色の花を咲かせる暖地の、海辺近くに自生する植物である。葉も茎もたくましいが、花は可憐な感じである。「一湾の海光まとい」とは何とも見事な取りあわせ、秋の海の姿を描出しつつその裏にひそかな感慨を託している。

川上　こよね

梵鐘のひびきて紅葉燃えたたす

（評）作者の心象風景をはっきりと示した句、この鮮やかな印象は決して偶然ではない。梵鐘のひびく紅葉は古刹の庭か、寺の石段を登りかけたときの情景であろう。晩秋の空が燃え立つというその鮮明な感激は、実感以外の何ものでもない、そこに意外な句の強さを感じとるのである。

片岡　包女

棘とげと手を刺す柚子をちぎりけり

（評）柚子の香漂う晩秋の山村を連想する。掌に刺る棘を厭いながら、柚子には何故こんなにも棘があるのだろうと恐るおそるに採っている。捥ぐのではなく千切と表現しているが「千切る」には無理遣りの感情があり、情景のありのままを見せている。

楠目　哲朗

通草とり山路分け入り稚気はやる

（評）紅葉の盛りの頃山へ入ると、見事な「通草」の実が木からぶら下がっているのに行き当る。あけびは熟れると縦に割れて中から白い果肉が見える、子どものころよく山遊びして実を食べた事を思い出す、この句も「稚気はやる」と表現しているところから、子どものころを思い出しての句であろう。見たもの、感じたものに対して、飾らず、偽らぬ、正直な句には意外な迫力を感ずることがある。「体験が俳句のかけがえのない要素だ」とは有名俳人の言。

秋耕や記憶の底にある軍歌　間　浩太

聞きながす母の繰り言深む秋　友草　水月

それなりに生きて老婆の冬支度　渡辺　万利子

行楽の荷物重たし蜜柑狩り　筒井　眉躬

新聞を広げひとりの小春かな　川村　博子

小春日や口のチャックもすぐ解ける　川村　千図子

柿の実の熟れたる色や改憲論　大川　節弥

行く秋や廻り縁なる禅の寺　弘瀬　うき子

秋茄子父の齢をとうに過ぎ　植田　紀子

平家琵琶調べ寂しき深山菊　松岡　きよ子

尺蠖に残りの生命計られし　津田　久美

さやかなる半眼の釈迦慈悲あふれ　森元　二美子

格子戸のきしむ歳月石蕗の花　刈谷　志津

一人降り俄かに寒き終電車　小島　良

ささやかな山の暮しやむかご飯　吉良　芙美

小春日や道路に野良猫転げ居り　川村　愛

乱雑な書棚見過ごし秋は行く　中屋　桜子

長き夜に一句つづりて枕辺に　筒井　文

秋は行く漢方薬を買いにけり　伊藤　たみ

参道の吾に降りくる紅葉あり　中野　好子

鉛筆を舐めて秋陽のかずら橋　松尾　満津於

次題　「笑始」　五句

締切　毎月十五日

投句先

吾北教育事務所

上八川甲2010

〒867－2133